

わたしの教材・教具



下田有輝
長野 須坂支援学校



プールにうみキリンが登場！



「おさかなをキリンの中に隠してあげてね」



小学校の子どもたちの絵にもうみキリンが！

「うみキリン」とあそぼう

私の勤務する須坂支援学校は県内では唯一の市立の特別支援学校であり、小学校と同じ敷地に併設された学校です。教育課程はそれぞれ独立したものがあありますが、休み時間は子どもたちがまぜこぜになって遊んだり、運動会や音楽会などの行事は合同で行なったりしています。

小学部の水泳学習は「生活単元学習」として扱っています。プールに入るだけでももちろん楽しいのですが、物語の要素を加え、より豊かに水遊びができるよう工夫をしています。おとしのテーマは「ぐりとぐらのかいすいよく」。昨年は「にじいろのさかな～うみのそこのぼうけん」、そして今年は「うみキリン」！

プールの単元に入る前に「うみキリン」の読み聞かせをして、「今年のプールにはうみキリンがやってくるよ！」と伝えると、子どもたちの目はきらきら！ その期待に応えるべく、やっぱり背の高～いキリンがほしいなあということで、小学部の先生みんなで協力して単管パイプでキリンを組み立て、みんながキリンさんと呼ぶと、口から「キリンシャワー」が出るような仕掛

けを作りました。シャワーが出ると子どもたちから歓声があがります！

深いプールが苦手な子もいるので、キリンのおなかの下には小さなミニプールを作ったり、キリンの友だちとして大きなイルカやサメ、フラミンゴなどの浮き輪が登場し、一人でゆったり乗ったり、友だちと乗ってひっくり返ったりすることを楽しんだりしました。宙に浮かんでいるイルカにジャンプする子も！ 自立活動の先生が、キリンの背中を滑れるようにとキリンすべり台もこしらえてくれ、子どもたちは大喜び！ 楽しすぎてなかなかあがれない！ という「悲劇」もプールにはつきものなので、時間の最後に魚のおもちゃをプールにいっぱい放流して、お話の中にあるように、それを子どもたちが拾ってキリンの中に隠してあげてプールはおしまい！ 満足して子どもたちはプールをあとにします。

小学校の1年生のみんなもうみキリンシャワーで遊んでくれ、図工の時間に描いたプールの絵にうみキリンが登場したのもうれしいできごとでした！



村度ロボット

私は、通常学級で育った、やや重めの障害児だったので、障害のことでクラスのみんなに責められて、45人クラスであることが、多々ありました。「これこそ、絶体絶命やな」と思いながら、体を固くしていたことを憶えています。

この場合、大きく分けて二つの選択肢があります。一つは、泣いてあやまって許しを請うやり方。もう一つは、開き直って、自分も日ごろの想いを表現し、し



小森淳子

こもり じゅんこ / 1965年岐阜県生まれ。脳性まひ当事者。二児を育てながら講演・執筆活動。子育て終了後大学院へ。現在、岐阜協立大学非常勤講師。絵と言葉と音楽の世界が大好き。

っかりぶつかり合うやり方。「障害をもっていることが悪いわけではない」という自分の考えを曲げるのが嫌な私は、ほぼ毎回、後者を選びました。
低学年の頃は、そんなことがあっても、お互いすぐに忘れて、翌日は思わず一緒に遊んでしまうことが日常でした。高学年になると、クラスのみんなも、「形式的平等と実質的平等」とか、抽象的にものごとを考えられるようになり、絶体絶命もなくなっていました。

私は、人間関係や力関係に流されず、自分の考えを曲げない生き方、無理して気に入られようとしない生き方が、結局、自分というものを守ったと考えています。ぶつかり合ったからこそ、自分の心が壊れなかったと思うのです。

大人の世界はもっと複雑だし、いろいろな利害関係もあります。子どもの世界さえも、私が育った時代のような、朴訥ぼくとつとした雰囲気はありません。

しかし、ぶつかり合いを避け、力の強い人におもねり、人間関係ばかりを重視して、自分が大切にしたい理念や思想をおおざりにしていくと、いつの間にか心は干からび、ロボットのようになんて

ールでしか動けない人間になってしまうのではないかと思うのです。

身近なところでも、人間の顔をした村度ロボットが、うようよし始めています。国会中継を聴いて、特定の政治家や官僚だけを批判していた頃は気楽でした。「村度」とは、本来、相手の気持ちを推し量るといふ意味ですが、誰のためか、何のために推し量るのか、ロボットたちは本当の意味で深く思考していません。悲しいほど、稚拙です。

自分だけが大事で、うまくカッコよく生きるために、力関係に反応しまくって、舌を噛みそうな尊敬語で気に入られようとする村度ロボットたち。そんな安っぽい村度をされて喜んでいる、自己愛と自己顕示欲のかたまりのような、被村度ロボットたち。自分がどちらの村度ロボットにもならないようにするには、どうしたらよいか、そして、すでに村度ロボットになってしまった人たちがどう共存するのか、悩ましい問題です。それを考えるだけでも、心が疲弊してしまいます。怖ろしいことは、もはや、自由で自主的な活動の場も、その例外ではないという事です。